※ 貸家ふだ

昔、お七風邪が流行した。角館の某家でも他の家で張り出してある。

「吉さんおりません、お七もどれ」と、いうふだを書いてはることにしたが、字を書ける息子は、いつも親父にやりこめられているため、このときとばかり、張りふだは主人がかくものだといいはった。

親父は困って、夜こっそり他人の家のふだをもって来てはった。息子が朝みたら、「造作づきの貸家あり、一ケ月六円なり」という紙がはられてあった。息子は親父これは貸家のふだじゃないかといったところ、親父は風邪の神なら人のいない家にはこないだろうといった。